

Eureka XI

六年制通信 No.14 令和5年7月14日(金)号

相乗効果

ビビアン・リー主演の「哀愁」という映画が好きです。「風と共に去りぬ」の方が圧倒的に有名でしょうが、主人公の切なさが違いますわな。あの生意気なスカーレットよりも「哀愁」のマイラの方がよほど可憐です。相手役のロバート・テイラーが鈍感すぎて、無邪気にヒロインを傷つけてしまうのですが、全く男はバカですね。君たちも卒業してからでいいから一度観てごらんください。ちなみに原題は **Waterloo Bridge** ですが、邦題の方が素敵でしょ。「ウォータールー橋」では何のことかわからないし、観に行こうとも思わないかも。ましてや「ウォータールー・ブリッジ」なんていうタイトルなど、ありえないです。昔は洋画にも内容を暗示するような邦題をつけたものです。いくつか邦題と原題を比較してみましょう。「天使にラブ・ソングを…」(**Sister Act**)、「きみに読む物語」(**The Notebook**)、「カールじいさんの空飛ぶ家」(**Up**)、「愛と青春の旅だち」(**An Officer and A Gentleman**)、いかがですか。もちろん「タイタニック」のように邦題のつけようのないものもあるし、「ゴッドファーザー」のようにそのままのほうが内容をよく表している映画もあります。でも「ミッション・インポッシブル」なんて英語を知らないと理解できませんよね(昔あった同名のTVドラマは「スパイ大作戦」というタイトルでした)。「ダイ・ハード」(なかなか死なない)に至っては、直訳したところで「一生懸命死ぬ」ですから、わけがわかりません。英語には **Old habits die hard**. 「古い習慣はなかなか無くならない」という表現がありますが、英語の先生くらいですよね、これ知っているのは。いずれにしても、もう邦題をつける習慣がなくなったのでしょうか。多いですよ、意味のすっとわからないカタカナの題名が。

映画のタイトルだけでなく以前から不要なカタカナ語の氾濫に腹を立てているのですが、この勢いは止まらないのでしょうかね。アジェンダとかスキームとかアセスメントとか、聞き飽きましたよね。また、AI関係の記事などは「オープンイノベーションの時代」、「コンテンツ」、「コパイロット」、「創造性というプリズムを…」とかね、「コンテンツ」以外は全く理解できないカタカナ語で溢れています。教育現場にもアクティブ・ラーニングとかホワイトエンジンとか、聞いただけではわからない用語がたくさんあります。私も反省しなくちゃいけませんね、うっかり使っているかもしれないから。しかし最近耳にした「シナジー効果 (**synergy effect**)」はいくらなんでも普通に使える用語ではないですよ。小型の英和辞典なら載っていないと思いますよ。不親切にもほどがありますね。これ、どこで聞いたのか忘れましたが、「相乗効果」と言えよと思ったのを覚えています。アクティブ・ラーニングという単語が使われ出したこ

る、今までのように生徒が座って先生の授業を受けるだけでなく、生徒どうしの協働学習を通して一人では達することのできない領域にまで学習を深める、つまり一人学習では生まれることのない生徒どうしによる相乗効果を期待すると、当時そんなことが言われたわけです。英語自体は、synergyのsyn-がsynchronizeのsyn-で「共に」の意、ついでにchorono-は「時」、だからシンクロナイズは「同時にする」という意味、また-ergyの語源はergon「仕事」、ヘシオドスの『仕事と日』の仕事はerga(ergonの複数形)、要するにsynergyは「共働する」こと。そこから生まれる効果ですから「相乗効果」というわけですね。ちゃんと日本語を使えばいいのに、と思いませんか。

ちなみに生徒どうしで相乗効果を生むには、非常に積極的な探究心が必要なのですが、実は最も重要なことでありながら見落とされがちなのが一つあります。それは「協働」のあとに「一人」の時間を取る大切さです。たびたび藤井七冠の話をしませんが(ファンですから)彼もまた研究将棋を行います。羽生九段も島研という研究会で仲間と研究将棋を指していました。しかし、藤井七冠も羽生九段も、研究会の後の一人の時間が最も大切だと言っています。やさしい言葉を使うと「振り返り学習」ですが、これはたった一人の学習でないと自分の力にはならない、二人の天才はそう言っています。きっと二人とも頭の中で自分にしかできない整理の仕方をするのだと思いますよ。

今週のおすすめ

・ まど・みちお 『いわずにおれない』 (集英社)

この人の名前を私は知りませんでした。しかし「ぞうさん」は知っています。「やぎさんゆうびん」も知っています。「一ねんせいになったら」も知っています。「ふしぎなポケット」も知っています。まどさんは明治40年代に生まれ百歳を超える長寿を全うされた詩人です。30代で戦争に召集されシンガポールで終戦を迎えたそうです。これは、まどさんの人生と作品に対するインタビューをもとに編集された本ですから、まどさんの肉声の記録と言っていていいでしょう。

私が今回驚いたのは二つ。一つは詩人の感受性の問題です。戦争を経験した明治生まれの男が四十を過ぎて「ぞうさん」のような詩を作れるものなのか、ということ。詩人は子どものような感性を持ち続ける能力があるのだと、改めて知りました。はっきり言えば、今の私には欠片も残っていない「眼」を持ち続けていることに畏怖の念を感じるのです。自然を見ても動物を見ても、あるいは湯飲み一つを見ても、まどさんに映る光景を私はもう決して見ることはできないだろうと思ったわけです。詩人で凄いな。

もう一つは「ぞうさん」と「やぎさんゆうびん」の作曲家が團伊玖磨だったことです。知らなかった。この方、名エッセイ『パイプのけむり』シリーズの著者というだけでなく、超有名な作曲家なので全国の小中高大の校歌や学歌を多数作曲されています。京都産業大学の学歌の荘厳なメロディーが私は好きなのですが、あれを作曲した同じ人物が「ぞうさん」ですか。驚きました。ちなみに青山学院大学や松阪大学(のちの三重中京大学ね)の学歌も作曲されています。これも知らなかった。

BGMは Do As Infinity の Yesterday & Today でした…。